

2020 年度第 3 学期終業式校長あいさつ(2021.3.17)

皆さんこんにちは。

激動の 2020 年度も本日、終業の日を迎えます。

2020 年度は、コロナに翻弄された一年でした。そして、今も我々はコロナに翻弄されています。マスクが取れる日常になるまでには、まだまだ時間がかかると思います。

そうした先行き不透明な日々の中、年度を終えるに当たり、私は皆さんには「よく頑張った」と声をかけたいと思います。

今、芸術教室では、音楽、美術、書道の作品展が行われています。私も、皆さんが作成した動画も含め、見せてもらいましたが、面白かった。コロナ禍において、思い通りにはいかない面もあるけれども、そんな中でも皆さん方の持っているエネルギーや楽しさを感じました。

さて、今日はまず、そんな中、皆さんの活躍の一端を披露します。

最初に生物オリンピックです。すでに化学オリンピックでの生徒の活躍は校長散歩でもお伝えしたところですが、昨年 12 月 20 日に行われた生物オリンピックの大会で、高 2 の佐藤輝季君、高 3 鈴木響君、高 3 の浜田悠輝君が見事金賞 15 名に選ばれました。そのうち佐藤君については、日本代表候補となり、この後行われる最終選抜試験に参加することになりました。ぜひ頑張ってもらいたいと思います。

続いて武蔵大学との高大連携講座「ビジネスプランコンテスト」の結果です。この講座は、アントレプレナーシップといいますが、自分で起業、つまり事業を立ち上げてみようという精神を育てるために武蔵大学が行っている講座です。今年度は武蔵生も参加し、授業の総仕上げとして、この 2 月 20 日に「ビジネスプランコンテスト」が開催されました。そのコンテストで、大学生や一般聴講の社会人に交じって、武蔵生が賞を取りました。残念ながら優秀賞とはなりませんでしたが、アイデア賞として高 1 の曾良健太郎君、高 1 の浅井佑人君のペア、さらに高 1 の加瀬カケル君と高 1 の久米晃太郎君もアイデア賞、また審査員特別賞として高 1 の大橋理一君が受賞しました。おめでとうございます。

そして、数学です。高 1 の総合講座での授業を踏まえ、NPO 和算を普及する会が主催する第 24 回算額をつくろうコンクールで、高 1 宮本匠君が見事銅賞下平和夫賞を受賞しました。これは日本に伝わる「和算」を扱う研究発表で、全国 1600 程度の作品から選ばれたということです。おめでとうございます。

こうした生徒諸君が頑張る一方で、私のほうは、すでにお伝えしているとおり、お恥ずかしいことにコロナに罹患しました。その話をします。

1月8日の年賀式のときは、私は濃厚接触者に認定され、PCR検査を受けているというところまで話しましたが、その結果は陽性でした。あの頃は症状もなかったのですが、その後発熱をして入院。結局中等症ということで17日間の入院生活を送りました。

幸い、お医者さんや看護師さんのきめ細かな対応のおかげで快復することができました。看護師さんも病室には来ないようなイメージを私は持っていましたが、とんでもない。しっかりマスクや防護服をまとっていることが前提ですが、すぐ近くで血圧をはかったり、食事を持ってきてくれたり、優しい言葉をかけてくれたりなど、その職業意識の高さに感心させられました。

コロナにかかって思ったことは二つ。一つはコロナは足音もなく忍び寄ってくるということです。私も校長という仕事をしていますので、感染予防対策には人一倍気を使っていました。しかし、家庭内感染という形でコロナにかかってしまいました。どこでどう感染したかの経路ははっきりしていません。確かなことは、注意したつもりになっていても、コロナに罹患したということです。

もう一つは、コロナには絶対にかからない方がよいということです。コロナは呼吸機能を害します。私は入院中、だんだん呼吸ができなくなることを体験しました。少しずつ肺がおかされていくような、じわじわと進んでいくような感じを持ちました。あの感覚は忘れられません。中には、コロナも風邪やインフルエンザと同じだよという人もいますが、決してそんなことはない。絶対にかからないほうがよいと思います。

コロナも1年がたち、私たちも経験知が出てきました。つまり、飛沫感染の防止が重要で、マスクが有効なこと。若者や子供は重症化しにくい一方で、無症状のままウィルスを運んでしまう恐れがあること。ただ、最近感染力が高く拡大が報じられている変異株については、若者にもかかりやすい懸念があること。

元通りの日常生活に戻るには、まだ時間がかかるとは思います。みなさん自身も引き続きコロナには十分注意をして過ごしてほしいと思います。

さて、2021年の終業式を終えるにあたって、コロナの話とともに、10年前の東日本大震災のことについて、どうしても触れておかねばなりません。

10年前の2011年3月11日金曜日午後2時46分、東北地方太平洋沖に、マグニチュード9.0の巨大地震が発生しました。最新のデータで、死者は1万5899人、そして今もお行方不明者は2526人です。

皆さんは3.11のときに、どこで何をしていましたか？高2の諸君は小学校入学したてでしょう。中1の諸君はまだ3歳なので、覚えていないと思います。いずれにしてもリアルタイムの感覚はないと思います。

でも、私はもちろんよく覚えています。それまで経験したことのない大きな揺れでした。当時は埼玉県北部の校長をやっていました。被害はありませんでしたが、学校に残った生徒の対応で、その日は帰宅できませんでした。震災後、東北に2回だけですが、ボランティアに行きました。そこで見た家は全部流されてがれきや流された車だけが残されている風景と仮設住宅でお聞きした被災者の話は忘れられません。64年間生きてきて、あれほど衝撃のあった社会的出来事はありませんでした。

今年は3.11から10年がたったということで様々に報道されていますが、改めてこの3.11がどうして衝撃的な出来事だったのか。私は三つのキーワードと問いかけがあると思っています。

第一に、「理不尽」。東日本大震災、そしてそれに伴う大津波と原発事故はあっという間に多くの人の命と生活を奪ったあまりにも理不尽な出来事でした。「復興」という言葉が言われましたが、理不尽に人はどう立ち向うのか。大地震で壊滅的な被害を受けた経済や街をどうやって復興させていくかが問われました。

第二に、「突然の死」。特に、巨大津波は一瞬のうちに多くの人をさらっていきました。生死を分けたのは運命のちょっとした違いでした。さっきまで一緒に生活していた人を突然失う喪失感、そして行方不明者がいつか戻ってくるのではないかと期待をしつつあきらめざるをえない思い、さらに多くの人を苦しめたのは自分が生き残ってしまったことや、家族や仲間の命を救えなかったことに対する自責の念です。したがって、目の前に突き付けられた突然の死者の存在にどう向き合えばよいのか。生き残った人はどのようにして生きていけばよいかが問われました。

第三に、「想定外」。巨大津波も想定外と言われましたが、特に、この日本で原子力発電所が次々に爆発するなど、誰も考えていませんでした。しかし、その想定外の原発事故により、今も故郷を突然奪われた人たちがたくさんいます。また、原子炉を冷却し、その後

処理したものの放出できない汚染水や処理水をどうするかは大きな課題です。さらに原子炉をどのようにして廃炉にするのか、廃炉にする際のデブリの取り出しをどうするのか。加えてそうしたデブリなどをどこに保存するのかなど、技術的にも政治的にも見通しのもてない課題に、私たちは手探りをしながら進んでいかなければならない。代償はあまりにも大きなものでした。

放射性物質は心配だけれど、絶対に大丈夫だろうと思っていた原発が、この日本で爆発しました。安全だろう、大丈夫だろうという安全神話が崩れました。したがって、想定外という言葉で片付けて本当によいのだろうか。言い換えれば、大丈夫だろうと思っていることは本当に大丈夫なのか。さらに言うならば、地震や火山の多い日本で、果たして原発は安全たりえるのか。もし仮に安全だとすれば、それはどういう備えがなされているからなのかという、深く重い問いは突き付けられています。

もう一度三つの問いを述べます。

- 一つ、人は理不尽にどう立ち向かうのか。
- 二つ、人は突然の死者の存在にどう向き合っていくのか。
- 三つ、果たして想定外ということは許されるのか。

私なりにこの問いかけについて考えています。その答えをここで述べている時間はありません。一つ言えることは、自分に与えられた時間を精一杯生きていくことを積み重ねていきたいということだけです。皆さん一人一人にはぜひ、この問いかけに対する答えを、自分の頭で考えてほしいと思います。

というのも、この問いかけは、今から 75 年前の敗戦のときに日本人に突き付けられた問いかけであり、そして現在コロナにおいても突き付けられている問いかけだと思うからです。

コロナでも、その理不尽さで多くの人が仕事を失い、学校も日常のことができなくなりました。そしてコロナにおいて突然の別れを迫られた人もいます。また、コロナ禍においてたびたび出てくる「大丈夫だろう」という楽観的な見方はどこまで許されるのか。

出来事の軽い重いは言えませんが、先の戦争や東日本大震災で日本人に深く問われたことが今もまた問われていると思います。同じ過ちをくりかえしてはならない。私たちは、戦争の歴史から、そして 3.11 の歴史から学ばなければならない。そして今の時点において、一生懸命考えなければならないと思っています。皆さんも、どうぞさっきの問い掛け

について考えてみて下さい。

最後に記念祭の話をしてします。きたるべき記念祭については、これも記念祭小委員の皆さんとともに考えに考えて、過日、文書でお伝えしたように、6月初旬に延期すること、生徒・保護者への公開は行うものの一般公開は断念し、「オンライン中心の記念祭とすること」を決断しました。

この先新型コロナウイルスがどう展開していくかはわかりません。ワクチンの接種開始が報じられる一方で、感染者数の増減に一喜一憂する日常は当分続くと思います。相変わらず何が正解かはわかりません。そうした中においても、最善を尽くさんとする武蔵生諸君の頑張りにより、中止を余儀なくされた今年の 98 回記念祭から一歩でも二歩でも進めた、コロナ禍ならではの記憶に残る記念祭が実現されることを心から期待しています。

それでは、これから春休みが始まりますが、健康には十分気を付けて、元気に過ごしてください。